

「泣かなくてもいいですよ」 ルカ 7：11～14

I 導入部

おはようございます。2月第一日曜日を迎えました。この一か月「ぼっ～と生きてんじゃないよ。」とチコちゃんに叱られるかも知れません。今日も、愛する皆さんと共に礼拝をささげることができますことを感謝致します。

皆さんに祈っていただきました私の母の告別式も無事感謝のうちに終わりました。母が天の御国に行ったことを確信しながらの地上での最後のお別れの時でした。久しぶりに親族と同席して、良き時を持つことができました。私たち家族も7人揃っての行動も、久しぶりで、とても有意義な時を過ごすことができました。皆さんのお祈りに感謝です。

私たち人間にとっての最大の恐れは、死です。全ての者には、必ず死は訪れるからです。しかし、死を経験しなければならない私たちに、「泣かなくてもいい」と声をかけて下さるのです。今日はルカによる福音書7章11節から17節を通して、「泣かなくてもいいですよ」という題でお話しします。

II 本論部

一、イエス様の目も心もあなたの上に注がれている

今日の箇所は、死んだ息子が生き返るといってお話しです。私たち人間は、全ての者が死を経験しなければなりません。聖書の中には、死を見ずして天に上げられたエノクやエリヤの話がありますが、全ての人は生まれた以上、死を経験しなければなりません。全ての人は、共通して死を経験しますが、その死にざまは、死に方は様々です。愛する家族に見守られて、天寿を全うして召される人がいます。先日、亡くなりました私の母も、兄の家族に見守られて、天寿を全うしました。老衰でした。また、災害や事故によって死を経験する方々があります。病気による死、自死による死、貧困の死、虐待の死、孤独死と言われる死、その他、死に方は様々ですが、私たちは、誰もがいつか死を経験しなければなりません。

ヨハネの黙示録14章13節には、「今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである」という言葉があります。死ぬということは、縁起が悪いので、あまり「死」については語らない、触れないというのが、この世の説ですが、聖書は、主にあって、つまりイエス様を信じる者は、イエス様を信頼する者は、幸いである、と語るのです。死は悲しむべきものではない。幸い、幸せな事なのだと言聖書は語るのです。そこには、復活の望み、天国の望みがあるからです。

私たちは、死ぬという悲劇と死別という悲劇を経験します。一人の人の死は、愛する者

との別離を意味します。ラザロの死は、マルタ、マリアには大きな悲しみでした。会堂長ヤイロの12歳の娘の死は、ヤイロにとって、家族にとって大きな悲しみと痛みでした。そして、ナインの未亡人の一人息子の死も、彼女には大きな絶望と痛みを与えていたのです。

ナインの町から遺体を墓場まで運ぶ一行に、イエス様と弟子たち、それを取り囲む人々の一行とが出くわしたのでした。悲しみに満ちた葬儀の一行と希望と祝福に満たされたイエス様の一行が、町の門の所で出会ったのです。

ナインという町に住む一人息子を持つ母親は、夫を失い、そして、また、一人息子を失うという悲しみを経験します。イエス様は、この母親に対して、「**憐れに思い**」と聖書は記しています。他の訳では、「**深く憐れみ、深い同情を寄せられ、かわいそうに思い**」と訳されています。イエス様は、特にこの母親の事に関心を持たれたような気がします。それは、イエス様の母マリアさんも、夫ヨセフに先立たれた未亡人だったからです。マリアさんには、イエス様一人だけではなく数人の子どもたちがいました。しかし、大工の夫に先立たれて、子どもたちを食べさすために苦勞したことをイエス様は知っていたでしょう。だからこそ、ご自分が父ヨセフの大工の仕事を継いで、家族を養っていたのではないのでしょうか。ですから、夫に先立たれた母の気持ちが、イエス様には痛いほど感じたのではないのでしょうか。

しかも、一人しかいない息子に先立たれた、この母親には、将来に対する希望が何もなかったのです。だからこそ、この母親を知る人々、近所の人々が、彼女の悲しみや苦しみに寄り添っていたのだと思うのです。

やがて、イエス様の母マリアさんは、自分の息子のイエス様が十字架に磔（はりつけ）られるのを見、息子の死を経験するのです。ヨセフとマリアさんは、生まれたイエス様を神殿に連れて行きましたが、その時、シメオンという人は、イエス様を腕に抱き、マリアさんに対して、「**あなた自身も剣で心を刺し貫かれます**」(ルカ2:35)と語ったのです。一人息子を亡くした、この母親とやがて息子を十字架の死で失う母マリアとがオーバーラップしたのかも知れません。13節には、「**主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。**」とありますが、元の訳では、「**主は彼女を見て、彼女を憐れみ思い、「もう泣かなくてもよい」と彼女に言われた。**」とあり、彼女、つまり、この母親に強い関心を持って見つめておられたことがわかるのです。イエス様は、私たち一人ひとりをも見つめて下さり、私たち一人ひとりに強い関心を持っていて下さるのです。

二、イエス様はあなたの苦しみや悲しみをご自分のもとのされる

13節には、「**主はこの母親を見て、憐れに思い**」という言葉があります。「**憐れに思い**」とは、ただ、かわいそうだと感じる、同情するというような意味ではなく、相手の悲しみや苦しみを思うと、自分のはらわたがよじれ、腹が痛む、相手の悲しみや苦しみ、痛みを自分のことのように感じる、という強い思いがここにはあります。

ルカによる福音書10章には、良きサマリア人の話がありますが、このサマリア人は、傷つき、倒れているユダヤ人に、「**その人を見て、憐れみ思い**」(ルカ10:33)とあります。

また、ルカによる福音書15章には、放蕩息子の話がありますが、全てのものを失い、傷つき、帰って来た息子を発見し、走り寄った父親は、「息子を見つけて、憐れに思い」(ルカ15:20)とあります。サマリア人も放蕩息子の父親も、倒れ、傷ついている者の痛みと苦しみを自分のこととしたのです。サマリア人は、強盗に襲われる危険を覚悟し、自分の持っているものを使いました。放蕩息子の父親は、財産の全てを失い、憐れな姿で帰って来た息子を、そのままの姿を受け入れたのです。簡単なことではないのです。彼らの痛みを自分の痛みとしたのです。彼らの悲しみを自分の悲しみとしたのです。単なる、同情やかかわいそう、という感覚ではないのです。イエス様は、この母親の痛みと悲しみをご自分の痛みとし、ご自分の悲しみとされたのです。イエス様は、今私たちが背負っている痛みや悲しみ、苦しみをご自分の痛みや悲しみ、苦しみとして下さるのです。

ヘブライ人への手紙4章15節には、「この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。」という言葉があります。イエス様は、大家族の中で、父を失った母を思いやり、弟や妹たちのために大工をして働きました。私たちが経験するような人間関係の問題や経済の問題、働けど働けど楽にならない状況を経験なさいました。失望や痛みを確かに経験されたのです。そして、罪がないのにもかかわらず、罪ある私たちのために十字架の上で、ご自分を犠牲にして下さったのです。私たちの罪を全て、イエス様が受けて、裁かれたのです。「見て、憐れに思い」というのには、疲れ、痛み、悲しみ、痛む、私たち全ての者に注がれているイエス様の愛なのです。

三、イエス様はあなたの元にも訪れて下さる

夫に先立たれ、一人息子が死んだ母親の悲しみは、知人や近所の人々にはわかりました。ですから、彼らは彼女に寄り添っていたのです。イエス様は、この母親に、「この母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。」のです。「もう泣かなくともよい」と言える人はイエス様以外には存在しないのです。イエス様は近づいて棺に手を触れられ、担いでいる人たちが立ち止まったので、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われたのです。すると、若者は起き上がって物を言い出したのです。生き返ったのです。

イエス様が、多くの人々に触れて、「わたしの心だ」と言われてお癒しになりました。イエス様が触れられるのは、そこに愛があるからです。イエス様は、この母親を愛し、息子を愛し、母親と共に悲しんでいる群衆を愛して、棺に触れ、若者を生き返らせたのです。そして、悲しみと絶望の中にあった母親に生き返った息子を返されたのです。「もう泣かなくともよい」といわれた通りなのです。

死んだ若者が生き返った出来事を目の当たりにした人々は、神の業に恐れを抱きました。そして、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言いました。大預言者とは、旧約聖書に出てくるエリヤやエリシャを指しているようです。

列王記上17章には、ザレパテの未亡人の息子が死んで、その息子をエリヤが生き返らせたことが記されています。また、列王記下4章にはシュネムにおいて、エリシャが、裕福な夫人の息子が死んで、その息子を生き返らせたことが記されています。ナインの人々

は、「大預言者が我々の間に現れた」と賛美しましたが、このエリヤやエリシャの死んだ息子を生き返らせたことを思い出して賛美したのではないのでしょうか。ナインの町は、シュネムとエンドルの間であり、エリシャが奇跡を起こしたゆかりの地でもあったのです。神様の愛の目は、旧約時代も新約の時代も、そして、今も確実に注がれているのです。そして、あなたの上にも、神様の愛は注ぎ続けられているのです。

Ⅲ 結論部

16節には、「神はその民を心にかけてくださった」とあります。「心にかける」を直訳すると、「訪れてくださった」となります。イエス様は、私たち罪ある者に心をかけて下さり、私たち罪ある者の所に訪れて下さったのです。そして、罪を持ち滅びに向かう私たちのために、ご自分が十字架にかけられ、私たちの罪の裁きを受け、尊い血を流し、命をささげて下さったのです。そのことにより、私たちの罪が赦され、魂に救いが与えられ、イエス様が死んでよみがえられたことにより、死んでも生きる望み、永遠の命、天国の望みが与えられたのです。「今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである」と聖書が語るように、イエス様の十字架と復活を通して、死さえも幸いなものとされたのです。

金曜日には、三浦綾子文学講座があり、森下先生が「塩狩峠」を読み解いて下さいました。列車が連結から離れて、このままでは多くの方が死ぬという事態に、自分の身体を犠牲にして多くの人を助けたというお話です。その亡くなった日は、ふじ子さんという、愛する人との結納、婚約の日でした。主人公の母が、ふじ子さんに宛てた手紙に、「信夫の死は、母親として悲しゅうございます。けれどもまた、こんなにうれしいことはございません。この世の人はやがて、誰も彼も死んで参ります。しかし、多くの死の中で、信夫の死ほど、祝福された死は、少ないのではないのでしょうか。ふじ子さん、このように信夫を導いて下さった神様に、心から感謝いたしましょう。」とありました。

また、ふじ子さんの兄が、ふじさんと共に、信夫の死んだ場所に行く途中で、「かわいそうな奴、不具に生まれ、その上長い間闘病し、奇跡的にその病気に打ち勝ち、結婚が決まった喜びも束の間、結納が入る当日に信夫を失ってしまったのだ。何というむごい運命だろう。だが、そうは思いながらも、吉川はふじ子が、自分よりずっと本当の幸せをつかんだ人間のように思われた。」と記されているのです。

私たちも、人生において、信仰生活において、むごい事、悲しい事、辛い事を一杯経験します。でも、そのような悲しみを経験しながらも、「自分よりずっと本当の幸せをつかんだ人間のように思われた。」とか、「信夫の死ほど、祝福された死は、少ないのではないのでしょうか。」とあるように、苦しみや悲しみ、絶望さえ、イエス様にあって、良きこと、幸せだと思わせて下さるのです。私たちには、このイエス様がいつも共におられるのです。この週も、2月の月も、何があっても大丈夫です。イエス様は、全てのマイナスをプラスに、良きことに、祝福に変えて下さるのです。主と共に、安心してこの週も歩みましょう。